年寄りの間の珍問答　　H30,8,19　P43　　佐橋　稔雄

今日も三十五度を越す猛暑日である。こんなに暑くても、月に一度は、姉の元へ行くことにしている。姉は,二年前から金山の老人施設に入っている。私の家から駅まで歩いて十五分、電車で三十分、又歩いて、十五分で施設に着く。会えばとても嬉しそうで、来てよかった、と思う。

姉はよくしゃべる。母を連れて、姉と、姉の旦那と三人で、旅行したことが話題になる。途中で、旦那と母とが口喧嘩をして困ったそうだ。その旦那も数年前に他界した。息子の身の上話、その嫁さんの話、孫の話など、次から次へと、口から出てきて、女の長話には、本当に困っている。いつも適当に「ふん、ふん」といって聞き流している。

施設は姉の家から歩いて五分位のところにあり、施設と姉の家とを合せると、こんなことが十年以上も続いている。

姉は五歳上で、今年になって、会ったときの反応が急に鈍くなってきた。小さい声がさらに小さくなり、口数も少なくなった。声が小さくなるのは、姉の心臓や肺の機能が、衰え始めているためであろう。ことばの切れも悪くなり、話しの内容が分りにくくなった。これは、顎や舌の機能が鈍ってきたのだと思う。こちらは、話の内容を適当に聞いている。内容が姉からの伝達だけのうちは、適当に「ふん、ふん」でよかったが、内容が姉からの質問に変ると困ってしまう。そんなときは、聞き直して質問に答えるようにしている。

最近では、内容の論理性が悪くなり、何回聞き直してもわからないことが増えた。適当な返事をしてごまかしている。こちらも八十一歳になり、脳機能が低下してきたかもしれない。年寄りと年寄りとの間の珍問答である。